

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 最優秀賞

きせきみたいな夏祭り

千代野小学校五年

市川 いちかわ

心美 ここみ

「優子、急ぎなさいよ。」

「分かってる！」

今年の夏休みもおばあちゃんの家に行く。今はその準備をしているところ。この日が待ち遠しくて、何日も前からうずうずしている。理由は一つ。おばあちゃん元気かな？まあ、それもあるけど、きつとピンピンしてるから大丈夫。私が楽しみなのは町内の夏祭り。毎年変わらない、あの夏祭りが大好き。去年は色々あったから毎年変わらないわけでもないか。ああ、思い出してきちゃった。

去年の春、私たちの学校で毎年行われる学芸会があった。この学芸会も今年で最後だからおしやれして行こうか迷ったけれど、結局私はいつもの服で登校した。着くと、大親友のみさきが待っていた。みさきはいつもあまり目立たない子なのに、その日はとてもおしやれな服を着ていた。

「この服、どうかな。」

とみさきが聞いてきた。私はからかって、

「うーん、あんまり似合っていないかな。」

と言った。すると、みさきは無言でその場を去っていった。それから私たちは口をきかなくなってしまった。

数日後の朝の会で先生からとつ然、みさきが転校すると告げられた。このままじゃダメだと思つてあやまるうとしたが、やっぱり口をきいてもらえなかった。そしてみさきは転校していった。

私は楽しいはずの夏休みを毎日ぼーっと過ごしていた。こんなことになるならあの時素直に「似合ってる」って言えばよかった。そんなある日、家族でおばあちゃんの家に行った。家に着くと、ぼーっとしていた私におばあちゃんは、

「今日は夏祭りがあるんよ。一緒に行こうね。」ときそつた。夜、夏祭りに出かけてかき氷を食べた後、屋台を回っているとだれかにぶつかった。あわてて

「すみません！」

と言うと、何とそこにはみさきがいた。きよんとしていたみさきはやつと立ち上がると、目を合わさずに

「ごめん。」

と小さく言った。その声はやつと聞き取れるほどで夜店の呼びこみの声にかき消された。にげるように去っていったみさきに、それ以上声もかけられず、見送ることしかできなかった。けんかなんか忘れていて、また元通り仲良くできるかなと一しゅんでも思ってしまった自分に情けない気持ちでいっぱいだった。仲直りのチャンスをしたことがくやくて、せつかく楽しい夏祭りなのに、もう小六なのに、と思いつながら涙が止まらなかった。

やつと涙が止まったのはどれだけ経った後だろう。夜空にはこの夏祭り最大のイベントの花火が小さく見えた。よく見ようと歩き出した時だった。

「こんな所にいた！」

はあはあという息づかいとともに大きな声があった。そこにはさつき行つてしまったはずのみさきが立っていた。びつくりして

「どうしたの。」

と私が聞くと

「来て。」

と言うのが早いのか、みさきはいきなり走り出した。私はわけも分からず必死で後を追いかけた。すると人気のない所にいた。みさきは

「ここ花火がよく見える、私の絶景スポットなの。」

と言つてにっこり笑った。その顔はひさしぶりに見た、私の大好きなみさきの笑顔だった。私はこのチャンスのがすまいと、あやまることに一心で花火なんかそつちのけだった。すると、みさきが先に

「ごめん。」

と言った。

「本当はじょうだんだって分かった。だけど最後の学芸会だったから思い切って着てみた服だったのにあんなふうに言われて悲しかったの。」
と言った。私も

「ごめん。そんなことも知らずにからかった私が悪い。本当はすつごく似合ってた。でもみさきが怒っているようであやまれなかった。」
と言うと、

「えっ！全然怒ってなかったよ。私は逆に優子が怒ってるのかと…。」
私たちはお互い同じことを思っていたのがおかしくて笑い合った。その時最後の大きな花火が上がった。みさきは

「これは私たちが仲直りした友情の花火だよ。ずっと覚えていよう。」
と言った。私も本当に友情の花火なんじゃないかと思った。

「こんなことならもっと早くあやまっておけばよかった。」
ため息まじりにつぶやいた私にみさきは

「私たち意地っぱりだもんねー。そうだ優子、明日うちにおいでよ。」
そう言って遊ぶ約束をした。

次の日、みさきは最初に町を案内してくれた。

「ここはね、自然がたくさんあって、町の人も優しいから大好きなの。」
と言った。それから、みさきのおじいちゃんを作った野菜を食べた。どれもとてもおいしかった。私が帰る日、みさきは

「来年もぜひ来たい来てね。夏祭り一緒に来こう。」

と言って見送ってくれた。みさきも私もこの約束は決して忘れないと思っ

った。
ああ、きせきみたいな夏祭りだったなあとゆつくり思い出にひたっていたのもつかの間。

「優子、車に乗せる荷物は？」

お母さんの声でした。やばい！そういえば準備、全然してないんだって

「あと5分待って！」

とさげんだ。さあ、あの約束を果たしに行くぞ。

